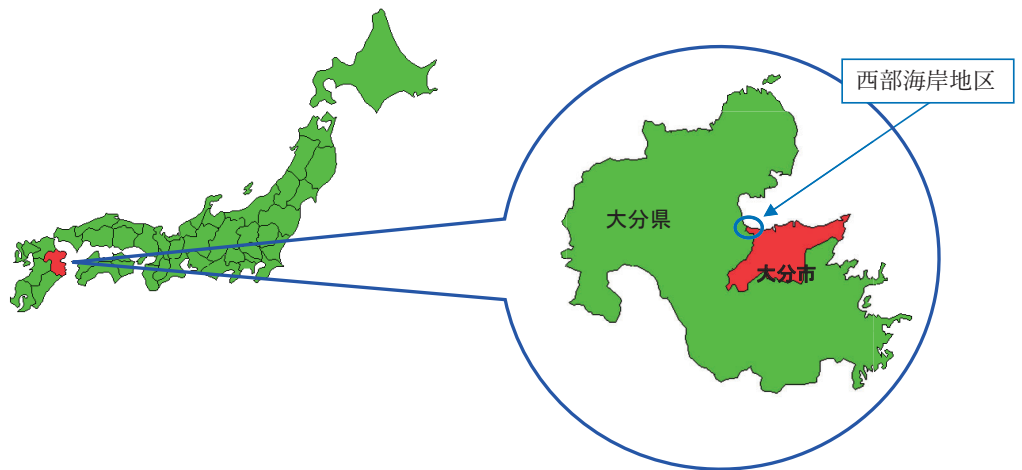


新たな道の駅の構想～着工、そしてこれから。 一道の駅「たのうらら」～

大分市 商工労働観光部 おおいた魅力発信局

はじめに

大分市は、九州の東端、瀬戸内海の西端、大分県の沿岸部のほぼ中央に位置する県庁所在地です。別府湾に面し、東部には南から大野川が、西部には西から大分川が流れ、両川が形成した三角州及び沖積平野からなる大分平野とその周りの丘陵を抱え、市域の約半分は



豊かな緑に覆われた中核市です。さらに、別府市との境界付近にあってニホンザルで知られる高崎山地区、及び、豊予海峡に浮かぶ高島地区は、瀬戸内海国立公園に指定されています。

また、高度成長期の1964年に新産業都市の指定を受け、鉄鋼業、化学工業などの重化学工業の進出に伴い工業都市として急成長し「新産都の優等生」と称されるほど飛躍的に発展しました。

現在、大分県の人口の約40%が集中する行政・経済・交通の中心地として栄える47万人の都市です。

計画地周辺の状況 — 観光資源の集積地

東九州の大動脈であり約6万台/日の交通量がある国道10号（別大国道）の沿線に位置する「西部海岸地区」は、国内有数の観光地である別府市に隣接する地区であり、高崎山自然動物園、大分マリンパレス水族館うみたまごなど、大分市を代表する観光地に加え、別大国道海岸沿いの景観が美しい田ノ浦ビーチやサイクルロードなどのレジャーも楽しめる場として多彩な観光スポットを擁し、大分市における観光振興を牽引する地区です。



事業の背景・目的 — 賑わいの創出と周遊の促進

「大分市観光戦略プラン」では、高崎山自然動物園、大分マリンパレス水族館うみたまごなどの既存の観光資源と連携し、西部海岸地区に多くの観光客を呼び込み、長く滞在してもらう仕組みづくりや、呼び込んだ観光客を市内中心部及び市内各地の観光スポットへ周遊させる仕組みづくりの必要性が謳われており、「大分市西部海岸地区魅力創造拠点施設形成基本構想」の作成が始まりました。

事業経過 — 構想から着工

令和5年4月に着工した、本市3番目となる道の駅「たのうらら」の建設までのプロセスは、数多くの挑戦と努力が詰まったものでした。

平成29年に設置された、学識経験者、関係団体、地元関係者、行政関係者の20余名からなる「大分市西部海岸地区魅力創造拠点施設形成基本構想」の検討協議会では、地域の特性やニーズ、そして地域の未来を見据え、熱心な議論を重ね、西部海岸地区の基本構想（平成30年）を練り上げてきました。そして、この構想を踏まえ、道の駅として建設する施設（地域振興施設など）の機能や設備について検討を重ね「憩い・交流拠点施設整備基本計画」（令和元年）を策定しました。

一方で、平成30年には、道路管理者である国土交通省大分河川国道事務所が「簡易パーキングの整備」着手の発表をしました。これを受けて令和元年度に、道路管理者との連携を強化し、一体となって「道の駅」を整備すること、また、それぞれの事業区分を謳った覚書を締結し、整備事業を推進する方針を固め



R3. 入札に関する説明会の様子

ました。また、「憩い・交流拠点施設整備基本計画」で定められた憩い・交流拠点施設は多岐にわたる機能を有するため、庁内調整を重ねる過程で様々な課題が浮上しました。その中でも特に、「道の駅」として長期に渡る事業継続は必須であるため、12月にサウンディング型市場調査を実施し民間事業者との対話を重ね、翌年2月「おおいたPPP/PFI地域プラットフォーム」にも積極的に参加し、民間活力の導入の可能性を探りました。

令和2年6月にも再び市場調査を実施し、本事業に対する民間事業者の関心度の調査や様々な意見交換を行う中、本事業の性質や規模、導入する機能や事業継続性を

考慮し、事業手法としてDBO方式（Design-Build-Operate）を採用しました。この方式の利点は、民間事業者が運営を見据えて施設の設計・建設を行うことで、費用対効果の高い施設の建設を可能とし、運営面では長い期間効率の良い維持管理・運営が可能となり、公共側の事業全体の経費削減効果が見込めることが挙げられます。その後も引き続き、実施方針（案）や要求水準書（案）の公表、本事業に関心のある事業者と個別対話などを実施し、事業全体の課題やニーズを浮き彫りにし、実施方針や要求水準書にどう反映するか検討を重ねるなど多くのプロセ



R3. 現地説明会の様子

スを経て、事業者募集へ向けその内容を固めていきました。

そして、令和3年7月ようやく事業者募集の入札公告にたどり着くことができました。その後も本事業の内容に対する理解を深めてもらえるよう、説明会や対話を繰り返すなど、多くの民間事業者の参加を促す努力をしつつ、ついに入札参加表明の受付を開始しました。その結果、5グループより入札参加の表明と提案書の提出があり、この事業に参加者があったことに安堵と喜びを感じました。しかし、ここからも容易ではありませんでした。提案書の審査では、膨大な提出資料に不備がないか確認後、外部有識者を含む事業候補者選定委員会に審査を諮り、その優劣を判断するために長時間の審議が行われました。そしてその中で、優秀提案者を決め、最終的に令和4年1月に事業者決定され、事業が新たな段階へ進みました。

令和4年6月には、3月に募集をかけた施設名称が、「たのうらら」と決まりました。この名称は、地名の「田ノ浦」や「楽しい」を「うららか」と組み合わせたもので、穏やかな海やのどかに照らす日の光をイメージしています。また、引き続き公募したロゴマークも地域の風景や魅力を象徴したデザインに決定しました。両募集とも市内や県内、さらには全国から応募があり、新たな施設への関心の高さがうかがえました。また、その設計も着々と進行し、年度末には、内閣府のデジタル田園都市国家構想交付金の対象事業にも採択されるなど、事業の着実な進展が見られました。

そして、令和5年4月、いよいよ建設工事が着手され、施設の建設が本格化しました。建設工事の進捗



建設中の道の駅「たのうらら」 R5.12月撮影

に伴い、「たのうらら」の姿が次第に具現化してきました。8月には道の駅登録もされ、晴れて道の駅「たのうらら」となりました。既に、建物周りの足場も取り外され、別大国道沿いに2階建の白亜の建物がその姿を現しました。この姿を見るたびに、地域の未来、大分の未来が具体的な形で動き出していることを実感しています。

そしてこれから

この春、ついには道の駅「たのうらら」が施設完成を迎えます。そして、開業準備を経て、夏から運用開始(予定)です。その特徴的な外観は、別府湾の波と田ノ浦地区の稜線を反映し、目を引く独創性に満ちています。また、施設内では昭和40年代の懐かしさを彷彿とさせる大分一別府間を走っていた路面電車の展示や、心地よいストリートピアノの音色が響くホールが皆様をお出迎えします。さらに、大分の豊かな食文化を堪能できる飲食物販施設が用意されています。ここでは大分市内県内の食材を使用した料理やお土産品をお楽しみいただけます。そして、2階からの眺望は風光明媚な別府湾を一望でき、心洗われる風景をお楽しみいただけます。

今後、多くの皆様に道の駅「たのうらら」で楽しい時間を過ごしていただきたいと強く願っています。そして、大分のゲートウェイとして、大分市をはじめ県内様々な魅力あるスポットの情報発信拠点となるよう、行政関係や運営事業者とも連携し取り組んでまいります。皆様のご来場を心よりお待ちしております。

施設概要

【地域振興施設】 延べ床面積約 2,700 m²（鉄骨造 2 階建）

情報提供コーナー、休憩コーナー、ベビーコーナー、非常用電源、備蓄倉庫、公衆無線 LAN、物販施設、飲食施設、多目的室、キッズスペース、歴史文化コーナー、ホール（おとの聴こえる広場）、音楽スタジオ、サイクルステーション・ランナーズステーション、展望スペース

【駐車場】

大型車 29 台、普通車 236 台、身障者用 5 台

【屋外トイレ】

男：(小) 12 器、(大) 10 器 女：35 器 多目的：2 器

【その他】

屋外テラス、EV 充電施設、サイクルラック



鳥観図



外観図



情報提供コーナー・歴史文化コーナー（奥）



情報提供コーナー



ホール（おとの聴こえる広場）



物販施設

（※パース図は計画段階時）